

或る、ひと夏の物語り  
ものがた

宇津木 勉  
うづき つとむ

青山ライフ出版



## 目次

まえがき	4
「向かいの席は、アメリカ人」	6
「七夕祭りに、スナップショット」	25
「八月のサンタと、盆踊り」	47

## まえがき

小学校々長あがりの、桜庭慎一郎と妻の志乃は、仙台市のとある団地で、年金で余生を送っている。

一方、一人っ子で育てられた博は、東京の大学を卒業後、某都立高校で教鞭を執っていた。

妻子四人で都内で暮らしているが、仙台の慎一郎が寄る年波のせいで、淋しがつてる様子が電話からも届いており、気が気ではない。

そこで、ひらめいた奇策とでも言うべき子犬のプレゼントが、いよいよ実現の運びに至ったのだ。

長男の健人が夏休みを利用して、祖父母に届けることを買ってでたのである。新幹線で、ケイトと名乗る女子大生に出会った健人は、卒論の取材旅行だというケイトと意気投合し、祖父宅へ誘う。

ケイトは、祖父宅に泊まりながら、ルポをまとめつつ、予想以上の成果を上げるとともに、様々な日本文化に触れて、帰京するのであった。

或る、夏の日の一コマである。

## 「向かいの席は、アメリカ人」

「……あと一〇分ほどで福島です。福島駅には三分間停まります。お降りの方は、お忘れものがないよう、ご準備ください」と案内の放送が流れてる。

同時に、我々の隣の席で膝にふろしき包みを載せ、向き合って座ってた七〇前後とおぼしき老夫婦も、腰を上げると降り口に向かつて歩きだした。

今こそ、千載一遇のチャンスとみたか、この僕に、念を押すように、リアクションをとってきたのが、向かいの席にいたアメリカ人の女子大生、ケイト・ミドルトンである。

「ケント、ホントニ、トメテ、モラッテモ、イイノ……?」

「うん、おじいちゃんさえO・Kだったら、僕は大歓迎だよ！」  
事実を述べるなら、どう答えたかも上の空で、あくびが追っかけてくるのを

こらえつつも、たちまち、まかた 瞼の上下がくつついてきた。

\*

僕の名は桜庭健人、この四月から、都内の某中学校に進級したてのホヤホヤだ。

ついでに、僕の家族も紹介しておこう。

都立高校で教鞭を執っている父と、小学校の先生をしている母。

お母さんの担任ではないが、同じ学校に通学してる、妹の五年生の愛子。

それと、一カ月ぐらい前からわが家の一員に加わった、しば犬の子犬でおす 牝の

エスとの四人と一匹である。

エスは、妹の愛子に異様なほど懐いていて、愛子の姿が見えないと、いつとき吠えまくる。

(子犬にも、女のやさしさというものが、伝わるんだろうか！)

エスの姉になるのか、妹分に当たるとかは分からないが、一緒に生れてきて、縁えんあつて桜庭家に引き取られてきた牝めすのバツハ。

このわんちゃんを、近頃ばやくことの多いおじいちゃんに、送り届けるのが、今回の僕のミッションなのだ。

そもそも、おじいちゃんのぼやきの根源は、お父さんにあるのではないかと、僕は思っている。

一人っ子の父が東京の大学をでると、都立の高校に就職し、お母さんと家庭を持つと、そのまま東京に落ち着いてしまったからだ。

おじいちゃんも、小学校を定年退職してからは、おばあちゃんと二人暮らしを送ってきたが、年を重ねるごとに淋さびしさが増してきたようで、電話でお父さんにたびたびこぼしているのを僕は知っている。

「何とか仙台の高校に、転任してこれないもんかのう……！」とか、

「仙台市内といわず、宮城県内なら対象校も広がると思うんじゃないよ……！」など。

「そうは言っても、夫婦でとなると簡単にことは運ばないよ。一応、教育委員会に要望はしてるけど……」

お父さんは、毎回のように弁解がましく、申し訳なさそうに、慰めの言葉をやさしく投げかけては、決まって最後に、

「もう少し辛抱してよ……、何か手立てをを考えてみるから……」

そう説得して電話を切るのである。

僕は、中正中立の見解として、おじいちゃんが可哀想でならない。

そんなとき、崖っぷちに立たされた父の編みだした究極の一手が、わん公をプレゼントすることだったのだ。

以前から犬を飼ってる同僚に、子犬が生まれたら譲ってくれないかと、頼んであった。

すると、その話を聞きつけた妹の愛子も、

「私もほしいっ！」

って言いだしたもんだから、それで、生まれたての二匹を貰い受けたってわけ。そのうちの一匹を、夏期講習で忙しい父にかわって、夏休み中の僕が届けることになったんだ。

バッハという大げさな名称になったのは、子犬に名前を付けるとき、桜庭博ひろしのイニシャルであるH・Sから、当家の犬はエスと呼ぶことにした。

しかし、祖父の慎一郎も祖母の志乃もどちらもS・Sである。

かといって、博のもう片方のHでは、あまりにも品がない。

困り果てていると、目前のテーブルにたたんでおいた新聞に着目した。

そこには、東京オリムピックに関するニュースが載っていたのだ。

かくて、おじいちゃんちに行くことになったもう一匹は、バッハになったのである。